現今の少女小説について

宮本百合子

今行われる少女小説について私は自分の荷にあまるほどいろいろの事を考えさせられるんです。

一寸行きずりに本屋の店をのぞいても飾ってある少女小説の数はほんとうに沢山でそれで又何故だか、「何子の涙」だとか、「何この歎」だのって云うのばかりですねえ。

少女小説って名のつくのは皆、涙だの、歎だのって云うんでなければいけないきまりが有るんでしょうか。

私はどう云うものかと思ってその沢山の中の二三冊読んで見ました。

それでどう云うものだか、と云う事を知りました。

私の読んだのは、どれもどれもみじめな可哀そうな娘を中心にして暗い、悲惨な、憎しみだの、そねみだの、病や又は死、と云うものをくっつけてありました。それを読みながら、私でさえ淋しい気持になりました。又そうなる様に書いてあるんです。

まあ少女小説を読もうと云うのはどうしても十二三頃からいつまでも子供っぽい人は十七八まで面白がって読むらしゅうござんす。

そうすれば何でも物事に感じやすい極く極くセンチメンタルになる頂上を少女小説は通って行くんです。

十五六から二十近くまでの娘の心と云うものはまる

で張りきった紘の様にささやかな物にふれられてもすぐ響き、微風にさえ空鳴りがするほどで、涙もろい、思いやりの深い心を持って居るんです。

この時代になれば、どんな幸福な家にある娘でも、何とはなし悲しい事ばかり考える様にもなります。わけもなくて世の中がいやになる、そんなのもこの時分なんです。

注意深い母親はそう云う時代の娘を必してだまってわきから見ては居ません。

なるたけ愉快な仕事をあずけるとか又は自分のそばに置いていろいろな事をしゃべるとか、当人のこのん

で居る事に力をそえてやるとかします。
けれ共そう云う母親はあんまりあるもんじゃあありません。
だまって本でも見て居れば安心して居ます。
斯う云う心理状態にある娘はきっと哀れっぽい涙ばっかり流さなければならない様な物語りばっかりすいて読むんです。
そしてまるで自分をその物語りの中に投げ込んで思うままに涙を流す事を楽しむんです。
けれ共そう云う事を私はいけないと思います。
若い娘の心に同情を呼び起させるためにはいい結果

があるかもしれません。

けれ共同情を起させると云う事よりも倍も倍も悪い事が起ると云う事を考えなければなりません。

現在の文学者としてかなり名のある方で少女小説に筆を染めていらっしゃる方はまあ別として名もない人々の世に出す少女小説の文を読んだ少し心ある人は、どう思うでしょう。

いかにも奇麗な文章には違いありません。

そして又いかにも可哀そうらしく書いてあります。

けれ共ほんとうに「実（み）」のある、重味のある文章か何かと云えば——

間違って居るかも知れませんが、「さあ」と云って頭をかしげなければならないんです。

頭の単純な娘達はそんな事を思うい間もなく只そのこけおどしの利く字のならべかたに気をうばわれてしまって自分でもその文をうのみにした様なものを書き出したり「大きくなったら」なんかとんでもない文学者を気取るものも出来て来ます。

三つ子が百度も聞いた桃太郎の話をあきもしないで、いくどでもきく様な気持の人達はあきもしないで同じ様な事を書いたのをよみます。

そして又いかにもその人達にとっては少女小説と云

うものが大した魅力を持って居るんです。どこまでもそれにまきこまれて少しも批評とか反向（ママ）とか云う気持は起りません。

そうして少女小説によって頭の大部分は育てられた娘達は涙もろいしとやかな内気な人にはなれましょう。

でも世の中の暗い方に目さとい人になります。

私は断う云う事を断言します。

学校の教育によって頭が育てられるのは部分で云えば極く少しのもので自由に読むもの又は聞いた事などによって人間の力で出来るだけの箇人性の大部分が築かれ□□□□（四字分空白）と

私は必して世の中の暗い事ばっかりに屈たくしない人間なんです。

だから世の中の人間の住んで居る外に尚美くしい世のある事も見ず、変る事のない美くしさのひそんで居る事もしらないで、只、うらみ、そねみ、争い、なんかにあくせくして居る人達をほんとうに不具な可哀そうな心を持った人達だと思って見ます。

そして又出来るだけそう云う人達の少なくなる事を願って居るんです。

心の平らな人、

絶えず希望の輝きをみとめて居る人、

そう云う人達の沢山な様にするのにはその人達のまだ布で云えば白地の子供の時代の育まれ様によると云う事が出来ます。

そして最も大切なのはその読み物だと云う事も出来ます。

外国はどうだか知りませんけど日本で小供に対しての読物の注意と云う事は先まであんまり重じられていませんでした。

十一二の子供は必して、カチカチ山、桃太郎　の御話に満足するもんでもなく、「フーン」と思うものだってありません。

絶えず新らしい事を知り又聞く事も若いものにとっては大切な事でその事に対する欲も劇しいもんです。その人々に多く読まれる少女小説を改革すると云う事は今のだれでもが考える事に違いありません。どうしたって今の様な涙っぽい物語りはやめなければなりません。

希臘（ギリシャ）神話的なそして又その中の人物の感情をさっぱりと単純にしたものを入れていいんです。

多くの婦人は一人前になってからは大部分せわしい、現実の不愛嬌な顔ばかりを見て暮さなければならない様に生れついて居ます。

せわしい中にも苦しい中にもどっかしらんにのびやかに奇麗な心のある様にするのには、何でも彼んでもを吸取紙の様に吸うその頃の頭の中におぼろげにでも奇麗な感情をつぎ注いで置くのがいいんです。

少女小説の著者の名にあこがれて、未来の文学者と自任してなま半かなものになったりその中に描かれた都会の生活の華やかさをしたって取り返しの出来ない事をする人だって必してないじゃありません。

少女小説に筆を染める人々は丁度大学の教授よりも、小学校の教師の方が責任が重いと同じ様に、大した作をする人々よりも一層の注意と責任と思慮が必要なん

です。
そして文筆も必して商売的でなくみっちりと重味のある考え深いしまった調子で書かなければなりません。健な筆で書かなければいけないんです。
流行的な気分を打ち破って澄んだ心を表わさなければいけないんです。
教科書よりも力のあるものだと云う事は忘れてはいけない事で、その読む人々の箇性を形ち造る一分子になる事を知らなければなりません。
少女小説の価値がもっとあがって一つの尊い作品として批評もされる様にならなければいけないものです。

極く楽観的なものと意志の強い立志伝的なものをまぜてそれ等のものが二十ある中に涙の出るものは六七あればいいんです。

悲しみと云うものは世のすべてのものより勝って微妙なものですけれ共少女小説のいままでのものに表われて居るのは必して考え深い悲しみではありません。

考えるねうちのあるだけの悲しみではありません。

たった普通の十三四または十五六の娘が必して尊い悲し味を味う事はしないものです。

若い子供達が悲し味を多く知ると云う事は私に云わせればいかにもいたましい事で又どうにかしてそうで

あらせたくないんです。
　私は少女小説と云うものについて随分いろいろの事を考えて居ますけれ共又私の性質からそれに没頭してそのためにつくすと云う事は出来ません。
　世の中にありあまるほどいらっしゃる少女小説の作者に申します。
　失礼な申し分かも知れませんが若い娘共に只悲し味と云うものばかりほか注ぎ込んで下さらないのなら、どうぞ筆をお持ちになることをやめて下さいまし。
　若しつくそうと思って居て下さる方々へはどうぞ価値のある力強い、美術的な又芸術的な、一つの或る馬

鹿に出来ないものである少女小説をお出し下さい。
私は今の少女小説は、悲しみの毒虫と云います。
少しでも改革され、少しでも立派なものになるまで
私はあくまで悲しみの毒虫と云いましょう。

底本：「宮本百合子全集　第三十巻」新日本出版社
１９８６（昭和61）年３月20日初版発行
※底本解題の著者、大森寿恵子が、１９１４（大正３）年４月24日執筆と推定する習作です。
入力：柴田卓治
校正：土屋隆
２００８年２月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。